

山鳩

『新壘』
67-1号

光より翳を恋ほしと鳴く鴉まぎれむ闇をまたも求め
て

冥界の夫の声かも底ごもり暗く山鳩との遠き距離感

襖越し黄泉の母に問ひたきふたつ老ゆる手順と死の手
順

愛といふも自己愛のほか何あらむわが耳鳴りに応へて
るたり

台風一過わが立上がりより魁けていさぎよきかなコ
スモス揺るる

冬の林檎

『新壑』
67-2号

息子らと住むことの否定は冬の卓に剥き出る「ふじ」と
ふ林檎の堅さ

ゆゑもなく人間を嫌いつつある姉がいつそり被る粗末
な帽子

かなしみの窮極にして帰りゆくは父祖の地ならぬひと
りの住处

夢の中もの言ひたげなる亡き母の遺志を少しづつ解し
はじむる

何をもてこの歳晩を締め括るただにかなしき加齢の
華やぎ

冬の孤独

『新壑』
67-3号

言ひ訳の儘ならぬ身の立場と弁へもあらぬ言ひ訳をし
て

よはひざん

足すばかり引くことのなき齡算しんしんと迫るものに
或る日怯ゆ

袖垂りて失意の形まざまざと疲れたるセーターをハン
ガーに吊るす

爪を切る 幻聴にあらね裡に聴くは父の血の音母の血
の音

みつ

繫がれて構はれぬ犬と睨め会ふ自由と不自由の互みの
孤独

吹き荒て生きゐる煩瑣に雪積り白き闇中に漂ふわ
れか

身を鎖しこころ用ざして吹雪く夜半死者と生者の名
の分けがたく

いつまでもつづくなり冬の混沌よ吹雪ける中に自らの
呪縛

~~~~~

きさらぎの水音やさしく韻くゆる張りつめし感情の  
溶けゆく頃か

藍ふかき天より零れくるものを余剰の光りと享けて  
存らふ

雪・雪 『新壑』5号

からうじて保つ命に触れて降る死者踰つばかりの夢雪  
明り

あてどなく行きて喪ふわが方位雪の小暗らさ黄昏の  
冥らさ

行く道を鎖ざして荒るる雪あらし明日を喪ふ重き  
予感に

人とりて極まりのなき寂しさや天秤座とふ自負持ち  
ながら

人生とふ容易ならぬもの担ひつつ今あることを讃へませ  
父母よ

春を待つ

『新纂』  
67号

陽に光る雪解の水の素早くてわが保つ意志は傾くばかり

薔薇のごと棘も一指にあらざればドライフラワーの汚れを落とす

鬱ながら春となる日の鋭さは狙ふものもつ小禽のまなこ

地震すぎて未だ鎮まらざる身の高さに九谷の壺の超然と立つ

一切は消したき念ひ追憶を彩にたとふればなべては無色

みやこ忘

『新壑』  
67-7号

帰り来てこの重たさは何ならむ身に付けたるもの外  
してもなほ

葎に敷く藁の温みを解しつつ人に還らむこころ定まる

透明なるゴミの袋に詰められしペットボトルのむき各々  
に

墓の辺の花つましく咲くものか都わすれは人をも忘  
れむ

薔薇咲かせひとりひとつ屋に住む人の孤独に来たる夕  
映えの華麗

灯を消して闇にひととき黙しゐるとこまでが私でどこまでがあなた

ノブひとつ押したる向ふの暗がりによりけりしに身構ふわたくし

われの中につね流れゐる河ありて架からぬ橋にふと行きどまる

黒土の湿り豊かな庭に育つ薔薇も毎も夕闇に鮮らし

倒されし草いきいきと立ち上る眩しきばかりのせつなき意志よ

水無月のみづ

『新壑』  
67-9号

自らにたゞろぐ程の無為の日々タオル絞りしのみ脱  
水機

絞りきりて意味なるものを竿に干すほどほどのひと生  
と言ふもかなし

間を置かず計報はつづき水無月のみづに泪を零せし深  
闇

聡明に老いゆく手立てを識りたくて神ならぬ身のわ  
れに跪く

名もならず財をも成さずして畢らむか身辺に殖へゆ  
く塵芥の量

ひとりの秋

『新壘』  
67-12号

白濁の進み見る目に届き来る螢観賞会の案内

何ごとにも当らず触らず野の赤まんま今日の天気予  
報は逸れて秋晴れ

柿の葉にプリンを包みて憩ふ昼老後とは斯かる形に來  
るもの

掌の冷えが秋の陽ざしにはどけゆく一人であることの  
孤独の否定

素足にて踏む秋の畳に冷えながら百パーセントひとり  
にて足る